

祇園御神詠

〔洛東祇園牛頭天王の御神詠となん、此御歌より近年桜樹を奉獻して社頭に植る事多し。〕

玉 葉 我宿に千もとの桜花さかばうへ置人の身もさかへなん

これは祇園の御歌とて人の夢に見へけるとなん

かゞし満の梅 〔当社神楽所の前にある紅梅の名なり〕

かゞしまば毎木もにほへ梅の花

宗 祇

〔今昔物語云、祇園は元山階寺の末寺にてなん有ける。又祇園の東に比叡山の末寺蓮華院といふ寺あり、しかるに祇園の別当良算という者ありて、かの蓮華院の堂の前に微妙紅葉のありけるを折にやりたりける。蓮華院の僧これを制して曰、別当いかでか天台末寺の内なる木を、こゝろまかせに案内も云ずして折取るべきぞ、極めたる非常の事なりと。〕

良算が使を返して折さゞりければ、良算大に嘖て、かくいふならば其木をみな伐て来れと従者をやりける程に。かの蓮華院の法師これを悟て従者の来ぬさきに、其紅葉を根際より伐てけり。良算いよく嘖りける。然るに横川の慈恵僧正、天台の座主として殿下の御修法に法性寺に在しけるに、急ぎ参て此よしを告げれば、座主大に嘖らせ給ひ、良算を召給ひける。良算放言して参らざりければ、座主山門の所司を呼下して、祇園の神人等一統に延暦寺に随ふべき寄文を儲て其に判を加へよと責ければ、神人等責られて佗て判を加へけり。斯して後祇園は天台山の末寺なり。早く別当良算を追放すべきよし座主より仰らる、良算はこれを事ともせず、楯を儲け軍を調て侍ける間、座主弥嘖て西塔の平南

房ばうに住ける睿荷えいかといふ武術第一の人と、致頼ちらいが弟にふせんに入禪にふぜんといふ名高き兵と二人を、祇園ぎえんに遣して、良算りょうさんを追しむるに、こゝろにまかせて追却しけり。其後よりは睿荷えいかを別当べつたうになして執行せしめけると云云

祇園社百首

あふ坂の杉より杉にかすみけり祇園精舎の春の曙

俊

成

祇園削掛神事ぎえんけつかけのしんじ

〔元朝寅刻ぐわんてうとらのこくなり。社説に曰、天照太神てんせうだいじんの御祭事とかや〕毎歳除夜子の刻の頃より社参の諸人雑言を

恣にし他人を誹謗す、仮令其声を聞其人を知るといへども、これを争ず、是を恨ず、邪義の祓にして勸善懲惡の意ならんか。其雑言に勝たる方迎年の吉兆なりとし、又参詣下向の道条にても放言するを、世俗謬て是を削掛といふ。抑神事は丑の刻許に、社務執行腰輿こしにのり、社司前驅して社参し、執行は拜殿はいでんに昇り神前に黙坐する事少時ありて経咒きんじゆを誦し、天下安全を祈る。東西の欄の内には削掛の木を左右に建置、おのゝく六屯、これ即十二月の数に表す。同時に是を燎とし、其烟の靡き向ふ方を見て今年五穀の豊凶を占ふ。厥后社司新に井水を汲で削掛の火を以て元朝の神供を調ふ。是新年の水火を改るの義なり。参詣の諸人も亦其火を携て家に帰り元朝の羹かまを煮なり。

千文稜せんもんはらひ

〔三月十四日当社にあり。社説に曰、宝銭ほうせん千文を抛なて小蠅をなはなす神を祓ふの所謂なりとぞ、世に誓文ばらひと

いふは僻言へきごんにや

神輿洗みこしあらひ

〔五月晦日、六月十八日にあり、当社の神輿を洗清むるに謂なり〕此日夜に入て四条通大和大路のほとりま
で昇出して祭事を執行ふ。日の中には壯麗なる葛衫を揃着て、御迎挑灯の数かず、踰物は大路に列をなし、祇園鴨川の
妓婦女伶の輩、月に警花に准てえならぬ風流をつくし、頭には珠玉を鏤め身には錦繡を絡ひ、女は髪のめでたからんこ
そといひしを、露をしまずして剃落し、むくつけき断髮魁頭と変じ、あるは色白く肌などのきよらに肥あぶらつきたる
をあらはにし、相撲取のまねびして翠の鬘を■毛にし、額には角を立、大花前になり、女とも見へず■し顔に出立たる
けしき。又はやんごとなき青雲の体に粧ひ、女御更衣の艶なる姿を横し、二八にたらぬ美少年の道に物乞ふ百とせの姥
に優して、日の斜に祇園の花街を東へ通り御社へ踰入るさま、是を見んとて都鄙の人々群りてらうがはしく、この青
楼かしこの仮店簾を巻て、浮浪放蕩の類ひさゞめきわたり、祇園林には棧敷を構て所せくまで連り、あからめもせず今
やくと待ところに、前囃子の琴三絃、後はやしの鉦太鼓に競ひ集り、炎暑をいとはず群をなし、大路は人の山にて、
日暮れば神燈のほか駢■く、絹張紙細工の台に灯を輝し、囃物の打こみに時をうつす。されば洛東の賑ひ此日に勝る
はなし。これ皆神の徳こゝに顕れ、治国平天下の御時に値て、万歳を謳ふ慶の声なるべし。

祇園香煎ぎをんかうせん 〔是祇園の名産にして世に名高し。西門の街に製する家四五軒ありて、竹器に入これを售。又下河原の茶店
には香煎を立てつねに出す〕

二軒茶屋にけんちやや 〔社頭の南、大花表の内にあり。いにしへは茶店に罐子をかけ湯を泌し香煎を立て、社参の人の休息所とす。

其濫觴は年曆久遠にして詳にしれがたし。今より百八十年前慶長の頃、東方にも建て東西両翼の如し、これを二軒茶屋といふ。むかしの例今にありて元朝ぐわんてうには祇園ぎをんの社中こゝに來りて王服を祝ふ、初めの罐子くわんすにしかは西方しかはの家に伝へて秘藏とす、これを見るに古代の作にして、胴に紅葉唐松の模様あり、名を紅葉釜となづく。毎歳六月朔日には灸餅を串にさして、豆腐に合せ味噌引とし、これを合餅といふ、氷餅に准し物ならん。此日祇園会鋒の児、其外參詣の人々にもこれを出す。又六月六日にも神樂所に於て、祭儀の役人にこれを出して嘉例とす。是加茂社御手洗団子の類ひなるべし。此茶店今はいにしへに變りて、つねに菽腐を剪て田樂の形とし、此一種を出して酒飯を售。此所の風俗なりとて魚肉を買ふ事を禁ず。これはむかし比叡山ひえのやまの末院にして、仏壟のほとりゆへなるか。今も山門あざりの阿闍梨あざり一夏中げちゆうらくへん洛辺らくへんの神社巡拜し給ふ時、西方の茶店に憩たまひ毎に昼食あるは、これむかしの遺風ならん。又阿蘭陀おらんだ人じん洛東らくとう通行つうかうの時、東方の茶店にやすらひけるも流例になりしとぞいふ」

月はもり花は葺けり二軒茶屋

季

吟

浮水うはみづ 〔二軒茶屋の名産なり。犬桜の実を梅酢に漬たるをいふ、是酒毒をけし食滯を治すとなん、來客懇望によりてこれを進む〕